"ぶんせき" 3, 171-172, 2013

ロータリー

談　話　室

日・米の大企業勤務後に2名で創業した経験から
——若人への期待——

福島高専第2回生の工業化学科卒後，社会人になってから45年が経過しました。この間に，国内では日立製作所に5年間勤務し，次には工業技術院 東工試（現：産総研）にて3年ほど いわゆる“もぐり研究生”という形で基礎知識を深めました。その後，Hewlett-Packard（現：アジレント）とDow Chemical社研究所に勤務し，Dow Chemical在職中には豊橋技科大から博士号を取得しました。そして，製造所/営業所（営業員）も有しない，R&Dを主体とする新事業形態の会社を，ポリマー分析用熱分解装置と金属キャピラリーカラムを両輪として，今から22年前に創業しました。そのキャッチフレーズは“独創的な自社技術で世界に貢献し，常にWIN-WINを指向するSmall Giant Companyとして，その道の世界No. 1を目指す”というものです。そして大企業では経験のできない幾多の困難を克服して今日では，アメリカ人4名，中国人1名を含む34名の事実上世界No. 1を達成できた小企業に至っております。その経験から，今春社会人となる学生さんへ若人への期待と称してエールを贈りたいと思います。

1. “人は信じても，仕事の結果は最初から信じない”

この小タイトルは，私が経営を実践してきた創業から紆余(うよ)屈折の22年間に得た教訓ですが，ほとんどの弊社社員にとっては，この短いタイトルはかなり刺激的ではないかと思います。私もこのタイトルを，もっと優しい表現にしたほうが良いのではないかと，感じています。しかしそこで折れると小企業の弊社は思わぬ方向へと舵(かじ)を取られ，最悪の事態を招くのではないかと感じます。実際，この言葉を初めて聞いたほとんどの新入社員や，特に大企業からの中途入社社員は，当初は，自分は上司に信頼されていないのでは？と思っているようです。しかしながら，仕事をするにつれて，彼らもこの言葉の真の意味を認識し，やがて納得するようになります。

どこの社会でも同じですが，仕事の成果を上司に報告することは当たり前で，特に社外へ報告する場合は必ず査読が入ります。その結果，テニヲハの訂正はもちろんのこと，まして，辻褄(つじつま)が合わない場合には差し戻しも当たり前です。このように，新たな業務を始めて間もない頃は，自身の出した成果を，的確な文章や言葉でもって他人に正しく伝えることは，そうそう容易なことではありません。そのようなときには，“人は信じても，仕事の結果は最初から信じない”ということを思い浮かべてください。私は，今でも自分の書いた文章を校閲して頂くと，加筆校正されることが多々あり，自分の情けなさを感じます。しかし，こればかりは，自分の能力の限界であり，鍛え上げる以外に近道はありません。昨年9月の千秋楽で，全勝優勝と横綱昇進をかけた日馬富士は，横綱白鵬との長い熱戦の末に勝利を収めました。全身から迸(ほとばし)る汗を拭(ぬぐ)いながら，この勝利をどう思いますかとアナウンサーに聞かれたときに，“日々の練習の積み重ねが今日の自分を創っていると思います”と，自分に言い聞かせながら何度も同じ言葉を繰り返していたことが，実に印象的でありました。これは，営む世界は違っていても，ほとんどの職業に通じる言葉ではないかと思い感心しました。

2. 社会人と学生，大企業と中小企業の違い

ここで，社会人と学生の違いについて考えてみます。学生はお金を払って，教育を受け自分を磨く権利を与えられていますが，その権利行使は義務でもあります。もちろんアルバイトで多少の収入を得ることはできますが，所詮学生でいる間は，親や社会から庇護を受けている立場です。学生は，何かあっても，『学生だから仕方ない』ということで許されるときもありますが，同じ年齢の社会人は許されず，何らかの罰則が下されます。

一方，社会人は働いて収入を得る反面，税金，年金や保険料を支払い，そうしたことにより自分の働いている会社を支え，広義の意味で社会の構成一員となります。またその組織にいる同僚には，家族持ちの人もいますので，その人達を間接的に養うことにもなります。言い換えれば，これで初めて一人前の人間として，自他共に認められることになります。また社会人になったら，お金を頂いてお客様を満足させる義務が発生します。この義務は学生には全くないとは言いませんが，両者には大きな隔たりがあります。これは，社会人になってからでないと判らないことでしょうが，このことを事前に知っているかどうかで，入社後の人生は大きく異なります。

大企業と中小企業の違いについては，諸々の議論がありますが，中小企業で楽しく働くために大切なことは，大企業のようにある限定した範囲の仕事をすれば良いのではなく，人数が少ない分，絶えず2, 3の複数の仕事は当たり前であることを認識しなければなりません。特に弊社では，英語が必須であり，例えば国際会議が近づくと，スタッフは日頃の業務はもとより，英語での発表の前準備も行わなければならず多忙を極めます。しかし，その見返りとして，本人の実力は必ず育成されます。大企業や公務員の看板を背負って歩んだ人が，退職後あるいは中途入社として様々な中小企業で働く場合には，そのような複数の仕事をした経験が少ないために，当初は極めて困難な局面に遭遇しているところをしばしば見かけます。

松下幸之助曰(いわ)く“誰にも，一人の人生において大きなチャンスは，最低3回はある”。柔軟な頭脳と体力に自信がある若人が，もし中小企業でのマルチ労働を将来の人生にプラスであると考えるのであれば，ぜひ自分の人生のために大企業ではなく

苦労は多いが，その分，実りも多い職場へチャレンジして欲しいと思います。

最後に，若い人へ下記の言葉[1]を贈ります。

“すべて原因自分論である。『人生は思うようになる』という人と『思うようにならない』という人がいる。これはどちらも正解である。人生は思うようになると思う人は，思うようになる。思うようにならないという人は，思うようにならない。まずは，「こうなりたい」という望みをもつ事が大事である。それがやがて「こうなるんだ」という意思になり，「必ず実現できる」という強い信念に変わる。会社というものは，みんな零細企業から幾多の困難を乗り越え大きくなってきた。要は志である。志の高い人は，必ず願いを達成する。”

1) “新・経営の原理原則”，p. 13 (2002)，(タナベ経営出版).

〔フロンティア・ラボ株式会社 ，渡辺忠一〕